生誕120年

小熊秀雄展

小熊秀雄は、明治34（1901）年、小樽区稲穂町10番に生まれました。現在の文学館の向かい辺りになります。幼いころ、稚内から樺太に移り、現地の小学校を卒業後、漁師、養鶏場や炭焼きの作業員、農夫の手伝い、伐木やパルプ工場の雑役などに従事、ほとんど独立の生活を営みました。

旭川新聞の記者をしながら童話や詩を書いていましたが、昭和3年、妻子を連れて上京。翌年から池袋に近い長崎町に住み、その後、町内を転々としました。生活は困窮を極めましたが、プロレタリア詩人会に入り、つぎつぎと作品を発表しました。昭和8年、小林多喜二虐殺後、プロレタリア文学陣営が次第に沈黙がちになってから、むしろ小熊秀雄の本領が発揮され、雑誌『詩精神』などに、「同志」に対してより痛烈な風刺詩を書きまくりました。

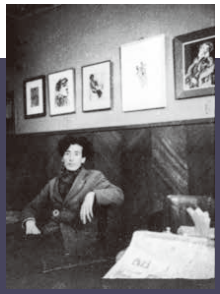
「私は、いま幸福なのだ／舌が廻るといふことが！／沈黙が卑屈の一種だといふことを／私はよつく知つてゐるし／沈黙が、何の意見を／表明したことにも／ならない事も知つてゐるから。」（「しやべり巻くれ」より）

小熊秀雄の住んだ長崎町には、アトリエ付きの小さな貧家がたくさん建てられ、「アトリエ村」と言われました。自分でも独特のペン画を得意とした小熊は、若く貧しい画家たちと親しくなり、彼らが集う池袋を、パリの芸術家の街になぞらえ「池袋モンパルナス」と名付けました。

貧乏暮らしが続き、結核の病状も進行。さらに左翼系文学雑誌の廃刊が相次ぎ、作品発表の場も失っていった小熊秀雄は、昭和15年11月、小さなアパートの自室で、39年の生涯を終えました。

小熊秀雄が小樽で生誕して120年目を記念し、ゆかりの深い旭川市中央図書館、旭川市博物館、旭川文学資料館の全面的な協力を得て、原稿や素描・水彩画、遺品を展示し、画家、童話作家、漫画原作者としても時代を抜きんでた個性を発揮した詩人の魅力を改めて紹介します。

『小熊秀雄詩集』より



池袋・喫茶店での個展にて

小熊秀雄の机と遺品

一子・焔

■1月15日（土）14時～15時

「詩人・小熊秀雄の妻、つね子さんの声を聴く会」

小熊秀雄を支えその遺稿を守り抜いた妻、つね子さんが亡くなられる前、病床で語りつくした詩人と一人息子の物語。このたび発見された2時間近くに及ぶ録音テープの一部をお聴きいただきます。

要予約

解説：平山秀朋

聞き手：玉川薫（市立小樽文学館）

特別協力：HBC北海道放送株式会社

各定員30名　聴講無料

2F文学館古本コーナー

＊展示をご覧いただくには入館料がかかります。

申し込み・電話受付

1月4日（火）午前9時半～

市立小樽文学館

0134-32-2388

■1月23日（日）14時～15時

「なつかしの雑誌めぐり」

学年誌、週刊誌、ファッション誌…。時代を彩った雑誌を画像でめぐりながら当時の生活や雑誌の隆盛を語ります。

要予約

語り手：鈴木浩一（市立小樽図書館館長）

聞き手：伊藤あや（市立小樽文学館）

市立小樽図書館と市立小樽文学館が初コラボ！「雑誌博覧会」をテーマに文学館では、1955（昭和30）年から1975（昭和50）年までの週刊誌をとりあげた展覧会を開催します。

現在の週刊誌のさきがけは、1922（大正11）年創刊の「週刊朝日」（朝日新聞社）と「サンデー毎日」（毎日新聞社）。新聞社がその取材力を生かし、ニュースをより掘り下げて伝える媒体として、戦後の経済成長とともに発行部数を伸ばしました。出版社の週刊誌も誕生し、週刊誌全盛期である1959（昭和34）年にはその年だけで20誌以上が創刊されました。

ミッチーブーム、剣豪小説ブームを牽引し、社会を映し出してきた週刊誌から当時の日本の姿を振り返ります。

「週刊朝日」　1955年12月11日号

「サンケイグラフ」　1955年10月9日号

小樽雑誌博覧会＠図書館

いつも雑誌を読んでいた

～月刊誌にみる戦後の暮らし～

2021年12月4日（土）―― 2022年1月30日（日）

観覧無料

主催・会場・お問い合せ

市立小樽図書館

〒047-0024 小樽市花園５丁目１-１

tel.0134-22-7726

■一　般　300円

■高校生・市内高齢者　150円

■障がい者・中学生以下　無　料

市立小樽文学館

〒047-0031 小樽市色内1－9－5　tel.fax.　0134 - 32 - 2388

公式Twitterで最新情報発信中！